

林 有章 百碑先生

くまがい探偵団 米山 実

北埼玉郡長の林有章（ありあきら）は明治二四年正月、郡役所の給仕として採用した満十二歳の三輪頼三郎少年の仕事ぶり、性格にほれ込み、二年後、養子にして東京神田の親友高橋拾六代言人（今の弁護士）に預ける。

有章の口癖は「富や金を残すより、人を残すことが人生最大の楽しみ」であった。

来三郎は、昼間は事務所で働き、夜は東京法学院（現中央大学）で猛勉強して十九歳で判検事登用試験に合格し、以降、検事総長、大審院長（現最高裁長官）、司法大臣になり、戦後は中央大学総長になる。

法曹界で活躍しはじめたころの頼三郎を有章は、次のように詠じている。

「若竹の すんなり伸びし 風情かな」

有章は、激動の安政六年（1859）、熊谷の横町（今の鎌倉町）で支配役を務める家に生まれた。

幼くして父を亡くして一人っ子の有章（幼名勘之助）は祖母と母とのひとからならぬ苦心のもとに愛育される。

幼少時代は腕白な喧嘩好きだったが、読み書きは熊谷寺の庫裏で待田宗隠に、書は千形神社にあった書塾で小泉香巒（こうらん）に習う。

福沢諭吉の「学問のすすめ」などを読んで勉強さえすればどんな立派な人間にもなれるとさとした有章は、読書と習字に精を出す。

有章の家のすぐ近くには、本陣の当主で二十歳年上の竹井澹如（たんじょ）が住んでいた。澹如は有章の資質を認め、郷土熊谷のために新しく事を起こすときは有章に話し、有章をたくみに使った。

澹如の知遇を得た有章は、十代で町の総代人、副戸長などに就くが、中でも澹如らと設立した書見場は県下初の私立中学折てい学舎となって七年間、中等教育の場として二百有余名の学徒を育てた。

東京日々新聞に投書した「民曾起こさざるべからず」が登載され、実際に町会を起こす運動も仲間とやった有章は、熊谷に正式の町議会ができた明治十二年、二十歳で初代議長になった。

明治一六年正月、澹如の家で澹如と代言人の高木彌太郎と有章は、桜の名勝熊谷堤の荒廃を嘆き、その年の七月に開通すれば町の体面にも拘わるから早急に桜を植栽すべきと話し合う。

三人が発起人となって堤防組合の了解を得たうえで同志者をつのり資金を集

め、埼玉県令の許可を取る。

三月、有章は植木職新三郎をつれて巢鴨染井の毛利侯別邸に出向き、染井吉野などの苗木四百数十本を買う。

川口までは大八車に載せ、その先は船で荒川を上るつもりであったが、染井・川口間が予想外の悪路で意外に日時と運賃がかわむ。これ以上日数をかけて船で運ぶと桜は枯死すること必至であり、窮地に立たされた有章は焦慮のすえ、鉄道工事用のレールが熊谷まで達していたことに気づき、鉄道局に事情を訴える。

同情した鉄道局は、無蓋車五輛に苗を積載し、無料で運搬してくれて、堤上にかがり火を焚いた徹夜の作業で桜の苗は無事に植えられた。

翌年二五歳になった有章は県議会議員に出ることを勧められるが、それよりも中央政府で経験を積む道を選び、大蔵省に出任する。

六年後、第一回郡長試験に合格した有章は、北・中葛飾郡長、児玉郡長を歴任して故郷熊谷に帰るが、名郡長と慕われた北埼玉郡長の時代、衆議院への出馬を勧められ一笑に付している。

敬愛する先輩澹如と同様、社会的地位には無頓着だった有章は、その後、熊谷を代表する知識人として文化面で大活躍する。

有章の撰文、筆になる石碑は熊谷内外で一時、百三十余基を数えた。

澹如らと建てた花塚（芭蕉句碑）とその工事中、有章が地中から発見し、欠けた字を補った三陀羅法師の狂歌碑は今も鎌倉町の石上寺で見ることができる。



林 有章紀徳碑（石上寺）

参考文献：「幽嶂閑話」林有章著 昭和10年 その他
(熊谷市公連だより 第21号 平成28年より)